

# 九鬼周造の時間論における二つの永遠の現在

——回帰的形而上学的時間における多と

一の両立を手引きに——

藤 貫 裕

## 序

本論では、九鬼周造の時間論における多と一の両立を巡る議論を、特に輪廻の論理と形相的単体性に着目して論じること、九鬼独自の回帰的形而上学的時間において二つの「永遠の現在」が成立することを明らかにする。九鬼は、「時間の観念と東洋における時間の反復」や「形而上学的時間」をはじめとする時間論において、全・同・一の事物と世界とが無限に回帰する円環的な「回帰的形而上学的時間」という特異な時間を論じた<sup>(1)</sup>。そして、このような時間は「フツサル」のいわゆる「形相的単体性」(eidetische Singularität)の実現されたようなものであり、ここでは「量的多様性」と「絶対的同一性」とが両立すると語った<sup>(2)</sup>。後程詳しく見ていくように、量的多様性と絶対的同一性とが両立する所にこそ、九鬼の回帰的形而上学的時間の独自性が存する。それ故、回帰的形而上学的時間の内容と意義をその独自性において真に理解するには、この両立の問題を形相的単体性の議論も踏まえて包括的に理解しなければならない。しかし、時間論が大きな注目を集めている近年の九鬼研究<sup>(3)</sup>においても、形而上学的時間における量的多様性と

絶対的同一性の両立の問題を形相的単体性の議論まで視野におさめながら主題的に論じているのは伊藤邦武のみである。伊藤は『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』（二〇一四）において、形相的単体性をはじめとする背景理論まで遡りながら九鬼の時間論を一冊かけて綿密に論じた。伊藤はその中で、「多を通じた一の実現<sup>4</sup>」とでも言うべき逆説的論理を通じて、通常宿命として語られる因果応報の論理を「転倒」する九鬼独自の「輪廻のメタフィジックス」を見出した。つまり、伊藤によれば九鬼は「因果応報が同一性へと還元されるというよりも、まさに因果応報こそが事物と世界の同一性を形成する」と考え、「宇宙の永劫回帰と同一の生の無限の継続だけが、根本的な潜在性の世界に対して、確定性、完足性、自己同一性を生み出すたった一つの可能性を与えることができる<sup>5</sup>」と考えたのであった。本論執筆者もまた、伊藤が打ち出した回帰的形而上学的時間の宇宙論的解釈、特に量的多様性と絶対的同一性の両立を「多を通じた一の実現」という逆説的論理において理解する点に賛同する。しかし、本論は伊藤とは異なる論証過程を経てこの両立の論理に迫る。つまり、伊藤が採用した外在的アプローチ―九鬼の議論を背景理論や類似の論論と比較参照して理解していく方法―ではなく、内在的アプローチ―九鬼の議論の内在的連関に特に焦点を合わせて内容を理解していく方法―を採用する。結論を先取りして言えば、この内在的アプローチを採用することで、九鬼の時間論における「永遠の現在」の理解に新たな光をもたらすことが出来る。つまり、回帰的形而上学的時間において成立する永遠の現在の永遠性を、無窮的永遠性と円環的永遠性という二重の意味において理解することが出来るようになる。

そこで本論ではまず、回帰的形而上学的時間という破格の時間の理論的可能性を探る九鬼の議論を参照する中で、無限の時間の二つの在り方、即ち無窮的永遠と円環的永遠という二つの在り方を確認する（二）。次に「形而上学的時間」と「時間の観念と東洋における時間の反復」の議論を参照しながら、回帰的形而上学的時間が具体的にはどの

ような時間であり、またそのような時間の独自性が絶対的同一性にあるとはどういうことかを確認する(二)。その後、九鬼が「実存哲学」において展開した、フッサールの形相的単体性とイデアチオンを巡る議論の検討を通じて、形相的単体性における多様性と同一性の両立の論理を明らかにするとともに、その論理を基に回帰的形而上学的時間における量的多様性と絶対的同一性の両立の在り方を示す(三)。そして前節までの知見を踏まえて回帰的形而上学的時間における永遠の現在の議論をもう一度見直す中で、従来から論じられてきた、絶対的同一性において成立する永遠の現在の外に、相等性において成立するもう一つの永遠の現在の存在を提起する(四)。

一

突然だが、「全く同一」の「事物」と「世界」とが「無限」に回帰する「円環的」な時間などというものを熱心に語る人物に出会った時、その人はどのように理解されるだろうか。好意的に解釈されれば、輪廻を確信する信心深い宗教者という位に思われるだろう。しかし、場合によつては非常識な時間理解に取り憑かれた狂人に思われてしまうかもしれない。しかし九鬼は、「いき」や「偶然」といった合理性に収まりきらない対象をもどこまでも理知的に追求せずにはいられない哲学者であった。そして、九鬼は自らの回帰的形而上学的時間があくまで理論的な「仮定」であると何度も断っている。そこでまず問われるべきは、何故「哲学者」九鬼が、仮定に過ぎない回帰的形而上学的時間などという規格外の時間をそれでも哲学的に語り得たのかという問題である。つまり、回帰的形而上学的時間を論じる理論的可能性がまず問われなければならないのだ。

この可能性を考える上で出発点となるのは、時間が有限であるか無限であるかという問いである。そして九鬼は、

この問いに応えて時間は無限であらざるをえないと結論づける。

時間を有限とする場合には何等かの意味で時間の起始または終極を考えない訳には行かない。然るに、時間の起始が必然的に仮定する、時間の非存在より存在への推移や、時間の終極が必然的に仮定する、時間の存在より非存在への推移は、我々の思惟に<sup>もと</sup>戻るものである。時間の原本的規定として過去、現在、未来の三様態が考えられる。そうして、時間の起始は過去のない現在として思惟するよりほかはない。然るに、過去のない現在なるものは思惟することが困難である。現在とは過去に基礎を有するものとしてのみ考えることが出来る。時間の終極なる概念も、未来のない現在として思惟さるる限り、同様の困難を伴う。時間有限の思想はかような難点をもっている。それに反して、時間を無限と考えることは思惟にとつて可能であるのみならず、時間の原本的規定に適合したものである。与えられた現在には過去との相対的關係に立ち、その過去はまたその過去と相対的關係に立つ。未来に対しても同様である。かくして時間の無限性が要請せられるのである。

(九鬼周造「形而上学的時間」『人間と実存』岩波文庫、二〇一六、一九四—一九五頁。)

九鬼によれば、時間を有限と考えると、時間そのものの存在から非存在ないし非存在から存在への推移、また時間の起始としての「過去のない現在」ないし時間の終極としての「未来のない現在」といった「我々の思惟に戻る」概念が生じてしまう。それに対して、時間を無限と考えれば、どの現在も過去に基礎を有しまた未来へ向かう相対的なものとして成立することが出来る。このようにして、九鬼は時間の無限性を要請するのである。

しかし、たとえばこのように時間の無限性を確保したとしても、そのような時間をどのように表象するかという問題

が生じる。つまり、起始も終極も持たない無限の時間は「起始もなく終極もない直線の形」か「円を描きつつ常に自己に回帰する」時間として二様に表象される。直線の無限としての時間に関しては、直線という概念自体が普段から数学や生活の中でしばしば触れる身近なものであるため、受け入れやすい。一方、円環的無限の時間は、理論的にも常識的にも極めて捉えがたく、それ故俄かには受け入れ難いように思われる。

ここで九鬼が着目するのは、直線表象の断片性と円表象の完結性である。九鬼は、直線として表象された時間は、完結して全体に到達することが出来ない断片的な「潜勢的無限（無窮、悪無限）」であると指摘する。他方円環的時間、つまり回帰的時間は、円を描くという回帰性においてまず無限であるとともに、全体として完結しているという完結性を有している（真無限）。さらに、その回帰が無限に繰り返されるといふ点では潜勢性をも有している。このように、円として表象される回帰的時間は、完結性と潜勢性を自らの内に備える「現勢的無限」として、単に断片的な「潜勢的無限」とは理性的に区別されうる。九鬼はこの点において円環的な回帰的時間を哲学的に考察する可能性を確保するのである。

しかし、また他の論者に従えば、現勢的無限の観念はもとより経験から来たものでもなく、想像によって生じたものでもないが、理性によつて措定されたものとしてそれ自身に存在するものである。我々が潜勢的無限と現勢的無限とを区別し得るのも、何等かの仕方によつて現勢的無限の観念を思惟しているからである。（中略）回帰的形而上学的時間是一方に回帰性によつて争われざる完結性を示している。しかし他方に回帰が無窮に繰り返されるといふ点で、なお潜勢性をもっている。それ故に必ずしも現勢的無限ではない。我々はかようにして回帰的形而上学的時間の観念に成立の意味を承認すると共に、万物再生または永劫回帰の思想が哲学思索から根絶され

ない核心的理由を知ることができる。

(同書、一九六一―一九七頁。)

二

前節において、回帰的形而上学的時間が全く理解の及ばない妄想でも信仰を通じてしか辿り着けない境地でもなく、理性的に扱い得る概念であるという考察可能性が確保された。そこで本節で確認したいのは、九鬼が構想する全く同一の事物と世界とが無限に回帰する円環的時間としての回帰的形而上学的時間とは具体的にどのような時間であり、またそのような時間の独自性が絶対的同一性にあるとはどういうことかという問題である。

九鬼が回帰的形而上学的時間の顕著な事例として取り上げるのは、輪廻の時間性である。輪廻はこの世のあらゆる生物がその死後生前の業に依じて生まれ変わるという思想である。九鬼は輪廻におけるこの「業」という概念に着目して、この概念が因果性そして同一性に基づく概念であることを指摘する。

輪廻は一般に因果律に支配されている。原因と結果とは連鎖をなしている。人間は一の存在から他の存在へ移るが、後者は前者によつて決定されている。善業によつて高貴に生れ、賢明に生れる。悪業によつて犬に生まれ、豚に生れ、蛇に生れ、蚊に生れる一見そこには変化があるが、その実、何等の変化もない。

(同書、一九七頁。)

例えば輪廻において、ある人間が次の生で高貴な存在ないし畜生として生まれ変わるといふ場合、一見全く違う存在になったとしても、それは前世における業という「原因」に基づいている。つまり来世の在り方は前世の行いの報い即ち「結果」であり、そこには原因と結果の間に確かな因果性があるのである。

さらに九鬼は、一般に因果性が同一性に帰着する点を確認した上で、全く同一のものに生まれ変わるといふ一見特殊な事例は、むしろ「徹底した論理」「典型的な場合」であると指摘する。

一般に因果性は同一性に帰着する。(中略)要するに輪廻説は「業による輪廻」として業説と不離の内的関係に立つ限り、「甲は甲である」という同一律に支配されている。それ故に、或る人間が全く同一の人間に生まれる場合は輪廻の例外的な場合ではなくて、むしろ典型的な場合である。この場合のもっている特殊性は徹底した論理にほかならない。

(同書、一九八頁。)

ここで注意したいのは、九鬼はこの議論において因果性を同一性に全く回収してしまつたわけではないことだ。つまり、九鬼はここで、他の事物への生まれ変わりを全く排した輪廻を提出したのではない。事物はあくまで、輪廻を通じて何度も今までとは異なるものに生まれ変わる。業に従うとはいへ、前世の悪人は現世で人ではなく畜生に生まれ変わり、逆に現世で業を清算した虫けらは来世でより高貴な存在に生まれ変わりうる。ここで九鬼が言おうとしているのはむしろ、一方で輪廻における生まれ変わりの多様性を承認しながら、他方あくまでそれがどこまでも同一性に支配されていると理解することで、果てしない輪廻の果てに全く同じ事物が再生するという主張である。例えば

悪人は輪廻において常に全く同じ悪人へと生まれ変わるのではない。彼は自らの悪業によつてある時は犬に、豚に、蛇に、そして蚊に生まれ変わっていく。しかし、輪廻がどこまでも業という因果的同一性に支配されているならば、無限の生まれ変わりを経る内にどこかで全く同じ自分に生まれ変わると考えざるをえない。悪人は、無限の輪廻の果てにいつしか全く同じ悪人として生まれ変わってしまうのである。言い換えれば悪業という潜在的同一性が、犬や蛇や蚊といったものに生まれ変わるといふ無限に多様な輪廻の過程を通じて自らを現勢化していく。そしてこの現勢化は徹底化された輪廻の論理に基づく時、直線的な終わりなき悪無限的過程ではなく、円環的に回帰する真無限的過程となるのである。

また、事物が厳密な意味で全く同一のものとして生まれ変わるとすれば、その時にはそれらを含む世界の全体もまた全く同一な仕方では回帰しなければならない。九鬼はこのように「輪廻説の地平を廓大し、同時に論理を徹底させる」ことで、「世界は、その同一性を保ちつつ、回帰する」という「劫波説」、即ち「一切の人間は相互間の具体的關係を保つたまま、諸々の事情はその具体的全体を背景としたまま、回帰的に生成するという觀念」としての「回帰的形而上学的時間」へと進んでいく(6)。

劫波とはサンスクリット語のカルパ (Kalpa) の音写で、インドにおける最も長い時間の単位であり、より詳しく言えば一つの宇宙時間が生まれ消滅するまでの時間のことである。『シュウエーターシュワタラ・ウパニシャッド』や『婆伽梵歌』(ばがぼんか) といったインド思想の經典は、このような劫波としての時間は終わると消滅し、新しく次の劫波が始まるという過程を無限に繰り返すと語る。また、九鬼によればインドのこの劫波説のような回帰的形而上学的時間の觀念は、ギリシャの「ディオニソス—オルフェウスの教説」、ピタゴラス、プラトンの「完全年」そしてプラトンの思想を受けついだストア派の「大宇宙年」といった思想にも見出だされるという。



その時には再びソクラテスとプラトンとが出るであろう。また各個人は同一の友人たちや市民たちと共に新たに生れ、同一のことを経験し、同一の事情に再び遭遇し、同一の仕事をなすであろう。また各々の町村、田野も同様に再び生ずるであろう。この万物の復帰は単に一回だけ起るのではなく、幾回も、否、無数に、無限に、同一のことが繰り返されるであろう。……既に以前に起つたことのほかに何等の新しいものはなく、一切は如何なる小事に到るまでも全く同一で変わらないであろう。

(同書、二〇〇—二〇一頁。)

このように劫波説や大宇宙年の思想においては、劫波が繰り返す度に万物の復帰が無限になされ、その際には「以前に起つたことのほかに何等の新しいものはなく、一切は如何なる小事に到るまでも全く同一で変わらない」のである。そして九鬼は、自らが語る回帰的形而上学的時間と他の回帰的時間とを注意深く区別していく。九鬼がまず取り上げるのは「自然的時間」(「農業的時間」または「神祇的時間」)である。このような時間として具体的にイメージされるのは、「日出と日没」「田植と収穫」「春祭と秋祭」といった一日ないし季節の移り変わりとして繰り返してある。九鬼は、このような回帰的・自然的時間「各周期間の絶対的同一性を要請しない(7)」が故に、時間の内容の細目全てにおける絶対的同一性を指定する九鬼の回帰的形而上学的時間とは異なると指摘する。

次に九鬼が検討するのは現象学的立場から見た回帰的時間である。九鬼がここで語る現象学的立場とは、「数える主観、または傍観者の意識的連続性が前提されている(8)」立場である。この場合、回帰的時間は同じ内容を繰り返しながら螺旋状に流れていく螺旋的時間として表象される。例えばクサンティペと結婚したソクラテスは、回帰的

現象学的時間において再びクサンティペと結婚する。しかし、このソクラテスとクサンティペの結婚はもとの結婚とは最早異なるものである。というのも、時間は一周することに数えあげられるため、彼等が結婚する毎に一周期分時間が推移したと考えることが出来るからである。

しかし、九鬼はこのような回帰的現象学的時間をも自らの回帰的形而上学的時間から区別する。というのも、「全く同一」の事物が無限に回帰する回帰的形而上学的時間は、厳密な意味で円環的な回帰的時間、即ち時間の内容だけではなく時間そのものも回帰する可逆的時間でなければならぬからである。こうして、回帰的形而上学的時間は車輪として表象されるような時間であることが要請される。つまり、車輪のように全くの同一の事物が無限回りに渡って回帰し、かつそれらの繰り返し回数的にも区別されない可逆的円環的な時間となつてはじめて、独自の回帰的形而上学的時間と言われるのだ。

そうして、回帰的形而上学的時間は可逆的の故をもつて厳密に円を描いている。時間は「矢」でもなく、「螺旋」でもなく「車輪」として象徴される。過去は未来であり得、未来は過去であり得る。「母たりし人が、再び、妻となり、妻たりしものが母となる。父たりし人が、再び、子となり、子たりしものが、再び、父となる」と『ヨウガタツトワ・ウパニシャッド』は「車輪」としての時間を叙述している。我々は回帰的形而上学的時間を現象学的時間に帰せしめることは出来ない。

(同書、二〇七頁。)

それにしても、劫波ないし大宇宙年が無限に繰り返されながらも数え上げられることなく、円環的で可逆的に回帰

するとはどのように考えれば良いのか。手掛かりとなるのは「時間の観念と東洋における時間の反復」における次の文章である。

さらに正確に言えば、問題は、とりわけ一つの大宇宙年から他の大宇宙年への移行に、異なつた大宇宙年を繋ぐ鎖にある。「ひとが樹にかけた綱をつかんで堀を飛び越えるように」一つの大宇宙年は新しい大宇宙年に飛び移るのである。このひとは受動的に時間によつて揺り動かされるような愚者であろうか。「監視者」を必要とするような幼児であろうか。むしろ、自ら新たに時間を創造する巧みな魔術師ではなからうか。我々は何よりもまず時間が意志に属するものであること、そして意志の存しないところに時間は存在しないということを確かめた。こうして、絶対的孤独のうちにあるこの魔術師は、自己の存在を終わらせ、また新たに再生させうる力のわざ、あるいはむしろ意志のわざを所有するような真の魔物 (démon) である。たしかに、その死とその再生との間には、かれの意志は現実態 (actuellement) においては存在しないであろうが、それでもなお可能態 (potentiellement) においては存在している。問題は「可能態における意志」(volonté en puissance) という観念に集中する。大宇宙年という観念の逆接全体は、おそらくこの点に関する思考の曖昧さから生じたのであろうが、しかしこれは、壮大な形而上学的思弁の誕生を可能ならしめた、豊かで幸いな曖昧さであつた。

(九鬼周造「時間の観念と東洋における時間の反復」『時間論』岩波文庫、二〇一六、一八―一九頁。傍点は原文ママ。)

九鬼はここで、「一つの宇宙年から他の大宇宙年への移行」における「異なつた大宇宙年を繋ぐ鎖」を問い、「自ら新たに時間を創造する巧みな魔術師」を見出す。この魔術師は「絶対的な孤独」のうちにあつて「自己の存在を終わ

らせ、また新たに再生させうる」「意志のわざ」を所有する「真の魔物」である。そして、その意志は現実態においては存在しない「可能態における意志」であるという。このような議論でまず着目したいのは、時間を自らの意志で新たに創造するこの魔術師は、自己の存在をも終結させまた再生させることの出来るということである。つまり、それは大宇宙年が回帰し消滅する時に、数える主体としての自らをもまた消滅させまた再生させることが出来るのである。このような「絶対的な更新<sup>(9)</sup>」を通じて、それは自ら「つねに新たに生を終える」ために「つねに新たに生をはじめ<sup>(10)</sup>」のであり、それ故大宇宙年は円環的に回帰しながらも数えられることなくその都度新しく消滅し再生していくのである。

しかし、大宇宙年が回帰する毎に消滅しまた新たにはじまると考える場合当然生じてくる疑問は、大宇宙年同士の関係、言い換えればそれぞれの<sup>(11)</sup>大宇宙年において全く同一であるところの個々の契機の関係である。九鬼は次のように応答する。

後者(回帰的形而上学的時間)<sup>(12)</sup>にあつては、その反対に、契機間に非連続性が存している。現在の今、過去の今、未来の今という各契機は一種の遠隔作用の如きものによつてのみ連結されている。(中略)後者にあつては、各契機は絶対的同質性をもち、互に交換されることが出来る。その意味において時間が可逆的である。

(九鬼周造「形而上学的時間」二〇九頁。)

大宇宙年間の個々の契機、例えば「現在の今、過去の今、未来の今」は一方で非連続である。それは、真に円環的な大宇宙年を構想するには、回帰毎に時間が完全に消滅し再生するという絶対的更新を考えざるをえないことから明

らかである。他方、各契機は絶対的同質性を持つがゆえに交換可能でもある。このように大宇宙毎の各契機が絶対的に同一で交換可能であると言われるには、非連続の連続としての連続性、即ち「一種の遠隔作用の如きもの」による「連結」も担保されなければならない。そして、この連結の問題を考える上で手掛かりになるのが「可能態としての意志」という概念であり、また「形相的単体性」における多様性と同一性を巡る議論である。そこでいよいよ、形相的単体性の議論に移っていくことになる。

## 二二

九鬼は、前節で論じた回帰的形而上学的時間において、「形相的単体性」が実現されたと言えるような仕方では量的多様性と絶対的同一性とが両立するという。

回帰的形而上学的時間の構造を更に明かにしよう。先ず、無窮に回帰する劫波または大宇宙年はフッサールのいわゆる「形相的単体性」(eidetische Singularität)の実現されたようなものである。無数の劫波または大宇宙年はいずれもみな絶対的に同一である。その特徴は一つの *εἶδος* (エイドス) の見本であるという以外の何ものでもない。従つて互に全然同一でありながら数の上で多であることが出来る。またその結果として真の意味の個性を備えていない。

(同書、二〇八頁。)

こ)ではまず、「無窮に回帰する劫波または大宇宙年」はフツサールのいわゆる「形相的単体性」(eidetische Singularität)の実現されたようなもの」という理解が示される。具体的には、「無数の劫波または大宇宙年はいずれもみな絶対的に同一」であり、それぞれが「一つの εἶδοςの見本である」点においてのみ特徴づけられるが故に、「真の意味での個性を備えて」おらず、「互いに全然同一でありながら数の上で多であることが出来る」のだという。本論の問題意識と照らし合わせて問題となるのは、多様性と同一性とが両立する在り方、つまり「一つのエイドスの見本」としての在り方である。この在り方を理解するためには、九鬼が「実存哲学」において展開した形相的単体性を巡る議論を、イデアチオンや個体的単体性といった関連する諸概念も踏まえながら参照していく必要がある。

まず確認したいのは、先ほど引用文における εἶδος (エイドス) という用語である。エイドスという用語自体はプラトン以来様々な哲学者が用いている用語であるが、九鬼はどのような意味でこの言葉を用いているのか。

曩にプラトンのイデアが可能的存在すなわち存在の本質の意味を最もよく表わし、個々の現実的存在はイデアに分預する限りにおいて存在すると云った。本質と存在とが普遍者と個体とに対する関係はそれによってほぼ明らかである。イデアは多数の個体に対して「共通者」(κοινωνία)である。

(九鬼周造「実存哲学」同書、七十五頁。)

この引用でエイドスではなくイデアと言われているそれは、「個々の現実的存在」がそれに「分預する限りにおいて存在する」ような「可能的存在すなわち存在の本質」、つまり多数の個体に対する「共通者」であるとされている。そして九鬼によれば、このような多数の個体に対する「共通者」としてのイデアを把握することがイデアチオ

ン (Ideation 理念看取) であつた。しかし、このイデアチオンは単にイデア把握全般を意味するのではない。それは、或る特殊な手続きを踏むイデア把握である。次の引用を見てもらいたい。

イデアチオンは或る経験された対象または想像された対象を一個の変形態として取り扱うことに基礎を有っている。すなわちその対象を任意の一例または見本であらしめる。換言すればその対象をして諸変形態の開放的無限集合の最初の要素であらしめる。変形作用を行うのである。一つの事実を見本として純粹想像の体験的構成を企図するのである。そうすると、その見本に類似した像が常に新しい像として得られる。そして、それらの諸像の集合を貫徹して一つの単一性が見出される。すなわち、一つの原像に自由変形を行なつた場合に、必然的な普遍的な形として残っているものがなければならぬ。それがなくては、最初の原像がその類の一例と考えることが出来ないような、そういう形が残つていなければならぬ。要するに自由変形を行う場合に各々の変形態および変形作用の過程そのものは主観的体験には任意のものとして現れて来る。その際、すべての諸変形態を貫いて一つの不變態が存していることに眼を向けることが出来る。諸変形態の差異点は我々にとって無関心のものであつて、諸変形態の謂わば絶えず相重なるところが不變なものとして残つてくる。それがすなわちイデアまたは本質である。

(同書、七十五―七十六頁。)

イデアチオンはまず「或る経験された対象または想像された対象を一個の変形態として取り扱う」、いわば「対象を任意の一例または見本であらしめる」ことにまず基礎を有していると言われる。その上で、そのような見本となる原像をもとに「純粹想像の体験的構成を企図する」、つまり見本に類似した像を次々と新しく想像していく。そして、

そのような想像的自由変形を通じてその過程を貫く一つの不変態が、即ち各々の諸変形態がその任意の一例に過ぎなくなるような、諸像の集合を貫く単一性が現れてくるという。このようにアイデアチオンとは、認識の対象を変形可能な任意の一例とみなした上で、想像上の自由変形を施すことで諸変形態に共通するアイデアの共通性を見出すという一連の把握プロセスのことである。このような把握の在り方を、私たちが「ハ」という音を把握していく場面を例に想像してみよう。まず確認したいのは、同じ「ハ」と呼ばれる音でも、明るいまたは暗い音色であったり、微妙に音程が高かったり低かったりと現実には様々に異なっていることである。そのような中で私たちは、自分でその音をイメージした上で実際に出してみたり、様々な人や曲によって奏でられる音を聞き比べたりする中で、徐々にそれらの音を貫く「ハ」音性を掴んでいく。このように、目の前で鳴るハ音をあくまで一例とみなした上で、その音が様々に奏でられるのを想像したり実際に聴いたりしてみる中で、それらの音を貫くハ音の共通性を掴んでいくことを、アイデアチオンの一例として理解できるであろう。

そして、このような特殊なプロセスを経て得られた「ハ」音のアイデアは、形相的単体性と名付けられるアイデアである。それは、「アイデア即ち形相の相互関係において最早それ以下に特殊化をもたない単体」としてのアイデアである<sup>(12)</sup>。

例えば「ハ」音のアイデアというようなものは、音一般、感覺的性質一般などというものに対しては類に対する種の関係にあるが、その種はまた最下位の種であるとも考えられる。そういうときには「ハ」音のアイデアはアイデア的単体性または形相的単体性と名付けられる。それは「ハ」音のアイデアに対して音一般のアイデアは上位のアイデアであり、音一般のアイデアに対して感覺的性質一般のアイデアは上位のアイデアであり、アイデアすなわち形相の相互関係において「ハ」音のアイデアは最早それ以下に特殊化を有さない単体と考えられるからである。



「音一般のイデア」は勿論「感覺的性質一般のイデア」は、「ハ」音よりも普遍的な上位のイデアである。それに対して、「ハ」音よりも特殊のでありながらかつ共通者でもあるような下位のイデアは存在しない。つまり、「ハ」音のイデアは、普遍的な共通者としてのイデアの中で最も特殊であるという意味において単体性、即ち形相の単体性を有するのだ。

九鬼はさらに、このような「ハ」音のイデアに從属する一切の任意の個別態は個体的単体性を有している」けれども、「イデアチオンの地平にあつては、個体的単体性の意味は殆ど形相的単体性の中へ没してしまつている」と指摘する<sup>(13)</sup>。例えば、現実において鳴らされた個々の「ハ」音は、音色や音程をはじめとする様々な面で異なる、つまり個体的単体性を有している。しかし、「ハ」音のイデアの把握というイデアチオンにおいて聴かれるのは、そのような個体的単体性ではなく、むしろそれらの音を貫く「形相的単体性」としての「ハ」音性なのである。つまり、イデアチオンにおける形相的単体性の把握では、単体性(個体)の捨象を通じて単体性(形相)を把握するという逆説めいた事態が起こっているのだ。こうして自らの個体的単体性を失つた個々の「ハ」音は、「ハ」音のイデアという形相的単体性との関連において「相等性」を有するに至る。つまり、それらが本来個別的単体性を有していたとしても、例えば蓄音機の替針のように型(イデア)に合致さえしていれば、それぞれは同等のものとして数の上でのみ區別される、任意に交換可能なものとなるのだ。

このようにイデアチオンにおいては個体的単体同士の関係が相等的となるが、形相的単体と個体的単体の関係は如何なる関係にあるか。「ハ」音のイデアにとつて多種多様な「ハ」音が有する個体的単体性は問題にならない。むしろ、

それぞれの「ハ」音の個体的単体性が大きいほど、それにも関わらずそれらが「ハ」音として把握される中で「ハ」音のアイデアの同一性がよりはつきりと証されていく。つまりアイデアチオンにおいて形相的単体に従属する個体的単体は、その多様性と特殊性を通じて形相的単体の同一性をより明確化していくのである。それは、形相的単体性のもとに従属する個体的単体がその特殊性と多様性を通じて形相的単体の同一性を明かしていく、まさに「他を通じた一の実現」という逆説的事態なのだ。

ここで確認された、「可能的存在が多様な現実的存在として現勢的に展開していくことで自らの同一性を明証する」「他を通じた一の実現」という形相的単体性の論理を踏まえて、一節の最後に提起した問題をもう一度考えていこう。その問題とは、絶対的更新を通じてその都度全く新しく再生消滅する円環的な回帰的形而上学的時間にあつて、それぞれの大宇宙年における全く同一の個々の契機は如何にして連結するのかという問題であつた。

まず微視的に見て、一つの大宇宙年内における個々の事物の輪廻は、形相的単体性の論理を通じて理解できる。前述したように、業という因果的同一性の論理を追求した輪廻においては、悪業という潜勢的な同一性が果てしない輪廻の中で悪人や畜生といった様々な仕方で見勢化されるのであつた。たとえどのような姿形に生まれ変わろうとも、原因である悪業の同一性は毀損されず、むしろあらゆる在り方が悪業の可能な在り方の現実における自己展開として理解される。つまり、業という共通者との関係において輪廻するそれぞれの事物は相等性を有する。さらに、個々の契機だけではなく、一つの大宇宙年全体もまた、「他を通じた一の実現」、つまり存在の無限の可能性の充溢としての「可能態における意志」が、一つの大宇宙年を通じて自らの絶対的な同一性を現勢的に展開していくと考えることが出来る。何となれば「可能態における意志」が、一つの大宇宙年を始めまた円環の終わりにおいて消滅させることが出来るからには、そこで現勢的に展開される全ての可能性は既にその意志内に含まれていると考えなければならない。つ

まり、可能態における意志が、一つの大宇宙年全体を通じて自らの内に潜勢的に含まれる可能性を円環的に現勢化していくと理解出来るのだ。このように、可能態における意志という共通者との関連においては、大宇宙年における全ての事物が、その見本として相等性を有するのである。

さらに巨視的に見て無窮に繰り返す大宇宙年それぞれはどのような関係を有するか。それらもまた、可能態における意志という共通者自身の潜勢的無限の現勢的自己実現即ちエイドスの見本として相等性を有する。しかし、大宇宙年相互の間では相等性だけでなく、内容的な絶対的同一性もまた成立しているのだ。というのも、前節でも確認したように、九鬼は大宇宙年の回帰が螺旋的ではなく円環的であると構想するために「各周期の内容に如何なる微小の差異をも許さない」絶対的同一性を「仮定」していたからである。

劫波および大宇宙年の概念は各周期の内容に如何なる微小の差異をも許さない。そうして、時間とその内容とを分離することが出来ない以上は、内容の回帰は時間そのものの回帰を意味しなければならない。ソクラテスとクサンティペとは常に全く同一の清新さをもって結婚することが出来る。これは結論ではない。仮定である。回帰的形而上学的時間の観念はこの仮定から出発するのである。

（九鬼周造「形而上学的時間」、二〇六—二〇七頁。）

そのためあくまで九鬼に則して理解するならば、可逆的で交換可能な大宇宙年相互の関係は、内容的に異なる個別的単体の可能の者との関係における相等性ではなく、それぞれが内容的に絶対的に同じであるという絶対的同一性としても理解しなければならぬ。こうして、回帰的形而上学的時間においては、一方で個々の大宇宙が絶対的更

新によつて連続性を断ち切れ絶対的に非連続的となりながら、可能態における意志との関連において数の上で區別されながら相等性を有し、さらに内容的な絶対的同一性において絶対的に可逆的で交換可能であるという仕方では連続するのである(14)。

#### 四

前節までで確認されたように、回帰的形而上学的時間は可能態としての意志との関連において相等的であり数の上でのみ區別されながら、内容的な絶対的同一性において可逆的で交換可能であった。このように回帰的形而上学的時間を相等性と絶対的同一性の両面において理解することで、回帰的形而上学的時間における永遠の現在の成立を巡つて新たな知見を得ることが出来る。まず確認したいのは、九鬼が二つの區別される永遠の現在を語っているように思われる点である。まず、九鬼における永遠の現在を巡る研究で必ずと言っていいほど着目されてきたのは次の議論である。

回帰的時間に関して我々はなお他に垂直的の「エクスタシス」が存すると云うことが出来る。現在は、一方には過去に、他方には未来に、同一の瞬間を無数にもつている。それは即ち無限の深みをもつた今である。底なき今である。

(同書、二〇九頁。)

九鬼がここでハイデガーの水平のエクスタシスを意識しながら「垂直のエクスタシス」として語るのは、大宇宙年が無窮に繰り返す中で現在が「一方には過去に、他方には未来に、同一の瞬間を無数に」もつことで「無限の深み」を獲得して「底なき今」即ち永遠の現在になるという事態である。しかし、九鬼は別の箇所でも永遠の現在を次のように語る。

通俗的時間の現在は未来によつて脅かされている。忽ちにして過去となり非存在のうちに没去る。それに反して「永遠の現在」は未来と過去とに没交渉である。未来と過去との地平をもたず、宇宙的に完結している。小宇宙的不是なく、寧ろ大宇宙的である。この現在は静止しないで円を描いている。

(同書、二二二頁。)

まず確認できるのは、ここで語られている「未来と過去とに没交渉」であり「宇宙的に完結している」永遠の現在は、底なき今としての永遠の現在とは異なるということだ。つまり、それは無窮の大宇宙年の繰り返しにおいて成立する無窮的な永遠の現在ではなく、一つの大宇宙年において成立する完結的で円環的な永遠の現在である。より詳しく述べれば、「前者の永遠の現在は、大宇宙年そのものの絶対的更新を通じて非連続の連続的に成立する、絶対的に同一な現在の無窮の重なりである。他方、後者の永遠の現在は、エイドスとしての「可能態における意志」が、自らの相等的見本の産出という現勢的自己展開を通じて形成する、円環的で完結的な一つの大宇宙年である。そして、九鬼が構想する回帰的形而上学的時間においては、まず相等性という「二次的意味に於て」完結的で円環的な時間が永遠の現在として成立しながら、それが無窮に繰り返される中で絶対的同一性に基づく「底なき今」としての永遠の現在が

成立するのである。九鬼が以下でオスカー・ベッカーの用語を借りて述べる「超存在学的現象」とは以上のような意味で理解されよう。

「永遠の現在」とは単に二次的意味に於てのみ未来と過去とを内含する「未来的および過去の現在」である。しかしその有する未来と過去とは非存在としてではなく、現在の現在契機として存在するものである。ベッカーはこの現象を「超存在学的現象」(hyperontologisches Phänomen) または「超現象」(Hyperphänomen)と呼んでゐる (Husserl-Festschrift 中のベッカーの論文参照)。

(同書、同頁。)

このように、全く同一の事物と世界とが絶対的更新を通じて円環的に回帰する回帰的形而上学的時間においては、量的多様性が相等性と絶対的同一性と両立することで、円環的永遠性を有する大宇宙そのもの、そして無窮的永遠性を有する底なき今という二つの永遠の現在が成立するのである。

### 結語

最後に本論での議論をもう一度まとめよう。本論では、九鬼独自の回帰的形而上学的時間における多と一の両立を巡る議論の検討を通じて、永遠の現在の永遠性を無窮的永遠性と円環的永遠性という二重の意味において理解することが目指された。そこでまず第一節において、そもそも全く同一の事物と世界とが絶対的更新を通じて円環的に回帰

する回帰的形而上学的時間を哲学的に論じ得る可能性を、時間の無限性の要請と円環的無限の理論的可能性の確保を通じて見出した。次に第二節では、類似の回帰的自然的時間および回帰的現象学的時間との比較を通じて、絶対的同一性と時間の絶対的更新に基づく円環的無限性において回帰的形而上学的時間を特徴づけた。その上で第三節では、九鬼が「実存哲学」において展開したフッサールの形相的単体性を巡る議論を、形相的単体性を得るために要請されるイデアチオンという概念まで遡り理解することで、「可能的存在が多様な現実的存在として現勢的に展開していくことで自らの同一性を明証する」という、相等性に基づく形相的単体性の論理を確認した。そして、この「他を通じて一の実現」という形相的単体性の論理を踏まえ、大宇宙年において輪廻する個々の事物と一つの大宇宙年全体を、「可能態における意志」という絶対的一者による無限の現勢的自己展開における相等物として理解した。さらに、無窮に繰り返す大宇宙全体まで視野を広げる中で、大宇宙年一つ一つが可能態における意志の相等物として数的にのみ区別されるとともに、内容において絶対的に同一であるがゆえに可逆的で交換可能であるため、回帰的形而上学的時間においては非連続の連続的に多と一とが両立していることを見出した。最後に第四節では、前節までで見出された相等性と絶対的同一性の区別を踏まえることで、回帰的形而上学的時間において成立するのは、無窮的な永遠の現在と円環的な永遠の現在という二つの永遠の現在であることを明らかにした。形相的単体性をイデアチオンまで遡って理解し相等性と絶対的同一性を区別することで、回帰的形而上学的時間には二つの永遠の現在があることを指摘した点に、先行研究に見られなかった本論の独創的な点が存する。しかし、残された課題も数多い。注でも指摘したように、伊藤は九鬼が提唱する絶対的に同一な無窮の大宇宙年という考え方に否定的な見解を示している。そのため、本論はさらに伊藤の議論と照らし合わされることで、九鬼の考え方のものの妥当性が問われなければならない。さらに、本論において提唱された「二つの永遠の現在」というアイデアは、九鬼が文学論で展開した、詩における永遠の現在の

文学的表現の再解釈を迫る。このような問いに応答して、九鬼の論じる「永遠の現在」の妥当性や可能性をさらに批判的に検証していくことが今後の課題となる。

注

- (1) 傍点は執筆者による補足。以下断りのない限り、傍点は全て執筆者による補足。
- (2) 九鬼周造「形而上学的時間」『人間と実存』岩波文庫、二〇一六、二〇八頁。
- (3) 近年の九鬼研究において時間論は大きな関心を集めているテーマである。九鬼の時間論研究を長年牽引してきた小浜善信(二〇一三、二〇一六、二〇一七他)特にここ数年で立て続けに九鬼の時間論を主題とする論文を発表している。さらに、これまでは九鬼哲学の別のテーマを中心に扱っていた森一郎(二〇一七)や嶺秀樹(二〇一七)や田中久文(二〇一七)といった研究者らもまた、九鬼の時間論に関連する論文を相次いで発表している。
- (4) 伊藤自身ではなく、本論執筆者による表現である。
- (5) 伊藤邦武『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』ぶねうま舎、二〇一四、二〇九―二一〇頁。
- (6) 九鬼周造「形而上学的時間」、一九八頁。
- (7) 同書、二〇三頁。
- (8) 同書、二〇四頁。
- (9) 九鬼周造「時間の観念と東洋における時間の反復」『時間論』岩波文庫、二〇一六、十七頁。
- (10) 同書、二十頁。
- (11) ( )内は執筆者による補足。
- (12) 九鬼周造「実存哲学」、七十九頁。
- (13) 同書、同頁。
- (14) このような九鬼による回帰的形而上学的時間における量的多様性と絶対的同一性の両立解釈に対して、伊藤はアイデア数論、そして現代宇宙論をも参照しながら「宇宙全体が一つのアイデアであり、それぞれの宇宙内存在者もまたミクロ



コスモスのないデアであるかぎり、それらの存在の様相に  
関して厳密な意味での同一性を存在論的に確保することは、  
もともと不可能だ」（『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』  
二〇九頁。）として九鬼の見解に否定的な見方を打ち出して  
いる。九鬼の時間論の理論的妥当性を徹底的に検証する上で  
重要な問題提起であり、別途詳細な検討を要する。